

〔書評〕

林 四郎著

『文章論の基礎問題』

長 田 久 男

林四郎博士は、「この本は、私の言語学的個性の塊りです。遠慮も何もなく、思いのままを記しましたから、この書が、良い名を得ても、悪い名を得ても、また、何の名も得なくても、すべて本望です」と「あとがき」に述べておられる。この言辞には、心うたれた。

本書は438頁に及ぶ大著である。著者長年の言語観察と思索とによる研究成果の一つである。多くの新しいことが提起されていて、そのすべてに言及するには力不足である。本書の中核である第2部を中心に問答形式で述べる。問答の「問」は、①から⑩までである。本書の内容を明らかにするために用意した。「答」に相当するところに、本書の内容を整理して示すことになる。疑問点若しくは私の考えは、その整理のなかで、その旨を述べることとする。

① 書名の『文章論の基礎問題』とは、どういう意味か。

著者が考えている「文章論」が既に成立していて、その上で、「私の文章論における基礎問題は、これこれである」と述べているのではない。理想の「文章論」を求めるために、それに向かって、ねらいをつけるための「基礎問題」という意味である。ということは、著者には、理想とする「文章論」の構想が、すでに、あることを意味する。

② 本書の構成及び論述内容の特色は、何か。

本書は、大きく第1部、第2部、第3部及び「参考資料」とからなる。

「第1部 構話活動総論」は、3章に分けて構話活動を概観している。構話活動とは、話し言葉、書き言葉を問わず、私たちが文章を作る活動のことである。「第2部 構話活動と構文活動」は、4章から11章までの8章からなり、著者も述べている通り、本書の中心である。論述の内容には、二つの系列があると理解した。第一の系列は、構文活動を構話活動からいったん切り離し、構文活動だけを独自に観察する立場である。第6章、第8章及び第9章で詳述している。第二の系列は、構文活動を本来存在すべき構話活動の流れの中で観察する立場である。第7章と第10章とで詳述している。冒頭の第4章は、その二つの系列を導き出しており、続く第5章と最後の第11章とは、両者にかかわる内容である。

第1部は、第2部の中心課題に先だち、著者の考え方、独自の術語又は概念などを、適切な事例を挙げてわかりやすく説明し、結果として第2部の先ぶれをしていることになる。

「第3部 文章と叙述」は、12章から15章までの4章からなり、文章叙述、作品用語、用字と文体、文脈の問題を述べている。

本書には、過去に公表した独立論文を、そのまま収録している「章」と「節」とがある

ため、術語の説明に重複はあるが、理解を妨げる点は少ない。これは、著者が長年一貫した独自の考え方でそれぞれの論文を執筆していたことの証左とも言える。

著者は、自分の新しい考えについて、先ず名づけをする。その術語が見事である。戸惑うこともあるが、発想の新鮮さと柔軟さとをそこに観る。次に実例をあげて説明する。その中には幾つかの仮説が自覚されており、それを証明している。視野の広さと思考の重厚さを思う。

③ 「第4章 文の成立事情——文章論的文論への序説」で提起していることは、何か。

『国語学』160集(1990年3月)に公表した論文をそのまま収録して、第2部の冒頭の章としている。このことには重要な意味があると理解した。この章で二つの立場を提起している。先に②で二つの系列としたことである。繰り返しになるが、第一の立場は、構文活動を構話活動からいったん切り離し、構文活動だけを独自に観察する立場である。そういう仮説である。「1文単位の構文解析」である。第二の立場は、構文活動を本来存在すべき構話活動の流れの中で観察する立場である。そのことは、構文活動を繰り返しながら、同時にまとまりの度合を気にしつつ文脈作りをしているという仮説となる。「文章論的構文解析」である。第一の立場と第二の立場による構文解析は、第6章以後に詳述される。

従来の「構文論」では、本章にいう第一の立場又はそれに近い立場が主であり、構話活動に出現可能な「文」を対象として、その成立原理と構造の解析とを目標としてきた。

それに対し、本書では、「文」を観察記述する二つの立場の存在を示したことになる。第一の立場と第二の立場とは、止揚できるのか。それとも、止揚するのではなく、別々の問題として位置づけることになるのか。関心のあるところである。

④ 「第5章 陳述と仮陳述」で提起していることは、何か。

陳述の概念についての論述ではなく、陳述がいつどこに成り立つとすべきかを実例によって論じたものである。「日本語文の述語には、描叙、判断、表出、伝達の四段階が含まれる」とするのは、著者の『基本文型の研究』(1960年)以来の考えである。本書で「陳述は、伝達段階にまで達したものが最も文句無しの陳述になるが、(述語の)どの段階ででも、とりあえずの陳述は果たされる。(中略)その『とりあえずの陳述』を『仮陳述』と称している。

提起していることを以下の5点にまとめた。

1 仮陳述の種類

A 文体的仮陳述

文末の述語が活用語の終止形で止まっている場合

B 文法的仮陳述

(1) 重文上句の述語にある陳述

(2) 合文前句の述語にある陳述

(3) 批評的副詞句の述語にある陳述

(4) 間投の句が陳述を持つ場合の陳述

2 仮陳述は本陳述を得て自身も本陳述になる。

3 陳述の完了度は一様でない。

4 陳述と句読点との関係は簡単でない。

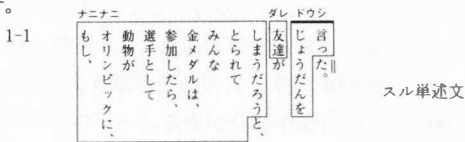
5 思考が自由に展開するために仮り陳述が必要である。

以上の整理で明らかのように、「仮り陳述」の認定は、新しい「構文論」及び「文脈論」で重要な概念となる。思考の自由な展開に必要であるだけでなく、文の長さによるリズムを作ること、陳述の完了度の違いによるリズムを作ることに役立つ結果となる。

⑤ 「第6章 文と文型と構文要素」で提起していることは、何か。

構文活動からいったん切り離れた「1文単位の構文解析」である。先に②で示した第一の立場の検証である。文章『動物の能力』を構成する21個の文を例にして、著者独自の「文型」のとらえ方と「文型読み」を詳述している。次にその一例を引用する(104頁)。

1 文毎に、ボックスによる文型図を示し、右に文名称、下に文型読みを記す。



★[ナニナニ]と[ダレ]が【ドウシ】た。

補語 主語 述語

構文要素(以下、直接構文要素を単にこういう)の下に、普通の文法用語でいわゆる「文の成分」の名称を記した。種類は大体、主語、述語、目的語、補語、環境語、修用語とする。ボックスの中が構文要素の「詞」の部分で、直後のテニヲハがその「辞」の部分である。述語の辞、即ち文末辞は、統叙の陳述を担当する大事な部分なので、二重線を付した。述語が叙事的な動詞である場合、【ドウスル】か【ドウナル】かで表した。「じょうだんを言う」のような語句を、「[ナニ]を【ドウスル】と扱うよりも、なるべく大きく捉えて単に【ドウスル】とした。以下、そのような考え方で処理する。「単述文」とは「述語が一つである文」のこと、山田文法でいえば「単文」である。「スル」は、述語が「ドウスル」という意味類型の動詞であることを表す。

ボックスの上のカタカナで書いているのが「代表疑問詞」で、ボックスの中の情報を5 W 1 H 式の言い方で代表する言葉である。★印の[ナニナニ]と[ダレ]が【ドウシ】た。が「文型読み」である。文型表示にボックス方式を用いたのは、時枝誠記氏の入れ子型図式の影響によるという。単文だけでなく複文をもこの方式で構文解析する。この考えが、やがて「日本語の基幹文型」の記述となる。

「日本語基幹文型」は、「運び文型」を、(1)一点文 (2)単述文 (3)複述文と大きく三分類とする。(1)一点文は、述語一点文と非述語一点文と二つに分け、述語一点文は下位に4類を認める。(2)単述文は、判断文 存在文 スル単述文 ナル単述文と四つに分け、判断文は下位に3類、存在文は下位に5類を認める。(3)複述文は、連結文と条件文と二つに分け、それぞれの下位に3類を認める。すべてに[例文]をあげている。「あとがき」によると『日本語基幹文型論』の樹立をこの後に予定しているという。

⑥ 「第7章 構文要素の文章論的見直し」で提起していることは、何か。

文章中の各文を、文脈の中にあって文意の発展を演出している働き手として観察する「文章論的構文解析」である。先に②で示した第二の立場の検証である。古典の文章と、第6章

で取りあげた現代の文章『動物の能力』を解析している。

『動物の能力』を構成する21個の各文について、「1文単位の構文解析の文型図」と「文章論的構文解析の文型図」とが図解の上で対照できるように工夫して示している。そのことは、両者の違いを視覚で知るだけでなく、「1文単位の構文解析の文型図」に対し、「文章論的構文解析の文型図」は、それが生まれる根拠を詳述する結果となる。図解の理解は難解ではあるが、幾つかのことが理解できる。①「構文要素」が分割されて小さくなる場合、②「構文要素」がそれを包む「透明ボックス」によって大きくなる場合、③「詞」とされていたものが「辞」にとりこまれる場合、④文の質、文の呼称も変わることがある場合などである。

それは何故か。(1)文章を生むために働く二つの力として、構文力と文脈の流れを作る力とがあること(133頁)、(2)説明文における文章の流れには「情報の層」と「情報管理(制御を含む)の層」と少なくとも二つの層があり、情報の受け継ぎ問題が生まれること(146頁)、(3)日本語文の文末述語には、自由操作部分があること(145頁)の指摘がある。

文章の流れの中で、文を解析することは、そこに具現している文の表層構造を解析するだけではなく、時には、具現している文の深層構造を解釈し、それを解析することでもある。解釈者によって、個々の事例の判別とその取りあつかいに違いが生じるところである。

「構文要素の文章論的見直し」は、「第10章 文章の流れと文塊」の記述へと続く。それは「構文論」を越え「文章論」の問題となる。

⑦「第9章 文のテーマ部とレーマ部」で提起していることは、何か。

第8章で、象鼻文をテーマ主語、レーマ主語を具えた日本語文の文型に特異な位置を占める文として論述した。重要な指摘である。続いて本章では、「文は原則としてテーマ部とレーマ部とから成り、テーマ部には旧情報が、レーマ部には新情報が配される」という考えのもとで、森鷗外『高瀬舟』の発端部分の16文を例にして、テーマ部とレーマ部の出来方と働きとを観察記述している。6点に整理した。

- 1 テーマ部は「掲げる部分」である。文構造の中では次の①～⑨である。①対人接触用語②文脈接続語③心の環境語④陳述副詞⑤時の環境語⑥所の環境語⑦テーマ主語⑧存在文の主語⑨条件文の条件句。
- 2 レーマ部は、「掲げる部分」に対し「収める部分」である。文構造の中では次の①～⑥である。①レーマ主語②修用語③補語④目的語⑤述語⑥条件文の帰結句。
- 3 問いかけの文は、テーマ部であり、問いかけに答える文は、レーマ部である。
- 4 テーマ部の各要素は、それぞれ自己主張をして、互いに合体はしないのに対して、レーマ部の、特に述語構造は、述語本体を核として雪だるま的合体を起し、一体となつて、テーマの掲げを収める働きをする。
- 5 環境語(状況語を改名)はレーマ主語より後に位置した場合、レーマ部に属することになる。
- 6 言語表現のレベルには、対象レベルと言語レベルとの区別があり、文型読みの「代表疑問詞」は、対象レベルでこそ有効性を発揮する。

文のテーマ部レマ部の認定は、当然先に⑤で取りあげた「1文単位の構文解析の文型図」に影響を及ぼし、新しい「構文論」で定着することが期待される。一部は、新しい「文脈論」にも「問いかけの文」と「問いかけに答える文」とが関与すると思われる。

⑧ 「第10章 文章の流れと文塊」で提起していることは、何か。

「文脈を作る大本は作者の作る文章の側にあるが、文脈の作られる場所は、読むなり聞くなりして、文章を受け取る人の頭の中にしかない。だから、文脈は、受ける人における一回的産物で、主観的なものであり、客観的にそこに出来るものではない」(206頁)という。明解な指摘である。

文脈の出来方を二つの面で捉える。第一は、文に即した理解の姿、これを「文塊」の形成に見る。第二は、頭の中の知の働き、「理解の流れ」というべきものである。

第一の「文塊」とは、「相接するいくつかの文が、特に密接な関係を保ち、文脈の中では、融合合体して1文になったような効果を持つに至ること」(203頁)である。文塊化は「情報の注ぎ」「情報の括り」「情報の並び」「相対者の合体」によって起こる。隣接2文の文塊を円形で表し、3文以上の文塊を楕円形で表す。

第二の「理解の流れ」は、二つの面に分けて捉える。(1)理解の具体的な物の姿を捉える。これを「ノエマ文脈」という。(2)理解の抽象面の相を捉える。これを「ノエシス文脈」という。

「文塊」と「理解の流れ」の考えは、著者独自のものである。文塊化の過程を追う作業の目的について、「(文章を)読んで理解する時に私たちの頭が何をしているかを考えること」であった。その頭の作業の中に文章各文の『文塊化』という現象が起こる過程を、なるべく少ないルールによって描くことを試みた。文章思考の文法を求めたと言い換えてもよい」(222頁)という。「文章を思考の言語的表現」とする著者にとって、「文塊」と「理解の流れ」の記述の完成は、「文章論の基礎問題」であり、著者の考える新しい「文章論」の一部となるものだろう。また、このことは、文章理解という言語教育に活用できる点もある。

⑨ 「第15章 文脈論」で提起していることは、何か。

本居宣長が、ことばの持つ特質を「言(ことば)」「事(こと)」「意(こころ)」として捉えたのに従って、文学作品に限定してではあるが、「文脈」を「言語文脈」「事物文脈」「心文脈」の3種の領域を設定し、更にそれぞれの下位に3ないし5類を設けている(384頁)。

その文脈の観察は、森鷗外『安井夫人』と『枕草子』を用いている。

本書の最終章である「文脈論」で特に注目したいことが二つある。

第一は、「文」と最終出来上りの「文章」との間に、何かもう一つ単位がありそうだということに著者が非常に執着して考え、その中間単位に質的単位を求めていることである。

第10章で提起した「文塊」は質的単位である。しかし、「文塊」は動く単位であって、過程的であり、文章が出来上がった時には消えてしまうものである(394頁)としている。「文塊」を動かない単位、消えない単位とすることはできないのだろうか、と私は思う。「文塊」は、出来たとき、必ず「連文のまとまり」として認定できるからである。

「段落」という古来の文章単位を、認めてはいるが、呼吸とか息継ぎとかに類する量的

単位だと思える(394頁)として、質的単位としては認めていない。しかし、市川孝氏は「文段」^{注1}として、また佐久間まゆみ氏は「段」^{注2}として、質的単位の記述を試みている。質的中間単位としての「文塊」「文段」「段」に共通する点は何か。それは、内容上のまとまりという点である。違う点は、そのまとまりの認め方である。

第二は、「言語文脈」の記述の中で、話し言葉を対象にして、「1コミュニケーション単位」の認定を試みていることである。『基本文型の研究』から導き出した「発話構造モデル」によってそれを試みたものであるが、まだ、理論化しているとは言えない。

⑩ 言及しなかった「章」と「こと」は、何か。

本稿で言及しなかった章は、第一は「第11章 構話助詞・構文助詞・構句助詞」である。『日本語学』(明治書院1987年第6巻第3号)に掲載した論文「文法を考える——『構話助詞』の論」を修正を施さず題名だけこの章名のようにして転載するとしている。ただし、本章の8「余論」で、別の機会に述べたいと言ったことが、本書で第7章を経て第10章「文章の流れと文塊」の内容になったと言い添えている(237頁)。

第二は、「第3部 文章と叙述」では、「第15章 文脈論」にのみ言及して、他は省略した。第3部の冒頭に取り扱うことの概要をあげているので(248頁)、そのことだけをあげる。「第12章 物語文の地の語りと人物の語り」では、物語文の「語り」ということに即し、ナレーターの語りと作中人物の語りとの関係について、「第13章 作品の用語とその働き」では、文学作品の用語研究という大きな問題を取り上げて、漱石『夢十夜』を使用語彙から読むことを試み、「第14章 文体形成と文字」では、ある縁で古事記の文章に触れたことから、漢字の用法と作品の文体との関係を考えることとなった経緯を述べている。

第三は、「参考資料」である。そこには、①「漱石『三四郎』冒頭99文の構文分析」の〈付録〉、②「本書の思考を導いた書物・論文」の〈参考文献〉、③「文章研究、本書に至るまでの著者の歩み」の〈著者関連文献〉の3点を詳述している。

本書『文章論の基礎問題』は、「良い名を得る」であろう。本書には、これからの「構文論」または「文章論」を論述するとき、学び、参考にすべきことが多い。

多くの章で述べている内容は勿論のこと、発想の柔軟さと新鮮さ、論証にあたっての具体性と視野の広さ思考の重厚さなど、著者に学ぶことが私には多かった。

本書の扉には、本書の校正中になくなられたお孫さんへの献詞が記されている。著者のその心を思いながら、本稿の筆を擱く。

注1 市川孝『国語教育のための文章論概説』(教育出版 1978年)145頁

注2 佐久間まゆみ「文章と文——段の文脈の統括——」(『日本語学』1992年11月)